

昭和16年2月1日 第三種郵便物認可  
平成22年4月1日発行(毎月一回 日発行)  
俳句雑誌 沖 第11巻第4号



沖

俳句雑誌[おき]

4月号

沖 発行所

湾

口

能村 研三

### 定年退職

三月の末をもつて私もいよいよ役所を定年退職する。

もう勤めなくてもいいと桜咲く

湾 口は 切子 光り や 涅槃 西風

明 快な 答へ に 疲れ 春 灯

昼 月の 冷を たた へて 涅槃 の 日

木 の 橋で 後 続を 待つ 花 曇

これは今瀬剛一さんが学校を辞められた時に作った句で、定年退職者の感慨が詠まれたものである。今の私の開放感と寂寥感の複雑な気持ちにもびつたりする句でもある。

役所には昭和四十九年に入庁以来三十六年間勤めたことになる。大学が土木工学の専攻であったので、二十五年間は技術職として建設関係の河川や道路の仕事に携わったが、後半の十一年間は主に文化行政の仕事を担当した。建設の仕事をしていた時代は、二足の草鞋を履く以上、仕事と俳句をきつぱり割りきってと覚悟を決めていたが、文化関係の仕事については、俳句や文学関係の仕事も関係が深くなってきた。これも何か運命的なものとして受け止めることにして、結果的には私にもプラスになることが大きかった。文芸関係だけでなく、美術や音楽関係の人たちとも仕事でお付き合いできたことも良かった。

桃活けて地酒の瓶のうすみどり

春まつり酢をもて締むる青魚

朧夜の朗読にある節まはし

紙風船銀の口より細き息

正業に本気を出せと亀鳴けり

山中の笹に日の射す涅槃かな

父は私立学校であったので当時は定年退職という制度がなく六十五歳まで働いたが、俳句と仕事をどちらも怠けることなく上手く両立させた。

先ほどの今瀬さんの句ではないが、私の方は、全く勤めなくていいという訳にも行かず、四月以降も役所関係の仕事にしばらく携わることになるが、今までよりははずっと開放感を味わえるのではないかと思っている。

能村 研三



# 蒼茫集



果実のごとく

辻 美奈子

そよりともせず繭玉の退屈な  
死に体にして崩れざる櫓ありぬ  
をさなごは果実のごとく春を待つ  
単車より降りて畦火を追ひかける  
あたたかや土が湯気噴く古墳群  
燕来る日のみづいろのランドセル

雪 菜

小山田子鬼

積る雪村を大きくしたりけり  
今朝降りし雪やはらかき足の裏  
掘当てし雪菜の芯の日に透ける  
雪さららに白む葬りの日暮どき  
炊立ての飯ほぐしゆく春の雪  
妻の座を確かなものに納豆汁

人 日

菅谷たけし

人日と思ふシャツから首の出  
寒晴や地に貼りつきしものの影  
天空を蹴り隼の矢となりぬ  
雪催擦り傷に血の滲み出し  
途切れぬし稿を継ぎ足す春の雪  
啄木忌活字小さき古雑誌

角 砂糖

安居正浩

春愁に一つ足したる角砂糖  
芽吹きけりたちまち空の騒がしき  
白雪姫になりそこねたる春の風邪  
明日から春泥となる光りをり  
豆撒きの終りはみんな鬼になる  
凍鶴のすでに限界かもしれぬ

眼 福 久染康子

遠富士の眼福貫ふ若菜摘  
垂直に傘さしてゆくぼたん雪  
凍滝に収まりきれずしぶきけり  
青空より移住して来しぬふぐり  
紙風船突きつつ丸み戻しけり  
廊下まで座蒲団敷かれひなまつり

美 学 大畑善昭

肩腰や雪を搔くにも美学あり  
雪国に住み食べもののみな菓  
ねこやなぎ光は水に散乱し  
春の雪五徳に灰の均されて  
春眠し起きよ起きよと目覚しは  
なべて霞むなか濫腸の庵見ゆ

時間の嵩 北川英子

流水の南下の旅と会ふ機窓  
光まみれに氷点のパリーの夜

白鳥湖の一灯ともる小棧橋  
待ち呉れし時間の嵩や雪積みをり  
逆風のすぐそこに春進まねば  
糸遊のもつれかはたとつまづきて

樹 氷 藤原照子

旅の荷を先に発たせり春隣  
一瞬に髪かみの白さや樹氷林  
榎松を守るとも襲ふとも樹氷  
佇めば月下樹氷となる恐れ  
指先の触れし脆さよ樹氷の尾  
樹氷林月上ぐ喜寿の夢かとも

中 今 千田百里

冬麗の豆腐屋の古時計かな  
寒晴や干物のかほのどんがつて  
中なかいま今いまに在りて餅食ふ夫婦かな  
木枯の運ぶ夕べの時報曲  
椿落つ音や波郷のこゑ知らず  
うららけし丸文字の祖は実篤で

遺品

荒井千佐代

海よりの風にかはりし鳥総松  
極寒や海底の藻に日の当たり  
くろがねの鍋のぐつぐつ雪しまく  
逢ふために死なむと思ふ冬桜  
調弦のごと雪吊りの縄絞る  
浅春や身に付けしもの総て遺品

山笑ふ

鈴木良戈

町並の欠けし雁木へ日がこぼれ  
鸞替や夕影すでに濃くなれり  
浚漑船ゆつくり動き日脚伸び  
海苔舟の傾きしまま接岸す  
天気雨過ぎたる山の笑ひけり  
春雪のおどるごとくにつのりけり

春近し

松本圭司

海風が頬にやさしく春近し  
珈琲に酸味がすこし日脚伸び  
方程式一つ忘れたやうな風邪  
北風が北風を呼ぶかくれんぼ  
またたきて点る街灯雪来るか

何処までも伸びゆくレール冬銀河

ひかりの粒

酒本八重

寒肥にひかりの粒のまじりけり  
みづ雪の光つてゐたり紅椿  
水餅の海へ逃ぐごと沈みけり  
遠き日や小函の底に受験票  
春めくや茶道学会よりてがみ  
たもとほり雛人形の街と知る

鯨塚まで

遠藤真砂明

盤石に立つや瀬をなす鰯の潮  
風折れの波の穂立ちも春隣  
鯨塚まで水仙の日向道  
戻り寒かな兜煮の濃味付け  
道幅に風のおふるる柳の芽  
少年が来る紅梅の雨あがり

土の香

水上陽三

人日の粥に土の香ありにけり  
冬麗の翹透くものの迷ひ入る  
寒風のたてがみ育つ富士東稜  
搔卷に無用の用の袖二つ

冬の鴨食はざるものも啄めり  
河豚鍋やこれ天然の虎といふ

立春大吉

吉田政江

初若菜和紙にくるみて持たせけり  
蘿蔔すじろのこの日ばかりは旅の上  
服葉の解き放たれて寒の水  
霜柱へきて白球の蹲る  
白菜を誰かれに分けまだ積めり  
立春大吉すいと懸垂上りけり

あと少々

辻直美

どの家も華やぐ蒲団干し日和  
一家揃つて豆撒にやつてくる  
雪折れの水仙にある蘇生術  
切干の膨らむ喜色ありにけり  
荃石や樽の中からこゑのして  
大寒のあと少々の利かぬ齡

台地の起伏

望月晴美

午後からの雨が消しゆく雪景色

霜の夜のポットに赤き保温灯  
重ね著て身の焦点の定まらず  
空き車庫に子の車あるお元日  
冬耕の大きな手もて兄逝けり  
末黒野の台地の起伏けものめく

愛の類型

秋葉雅治

シユプールのしるき交線樹氷林  
バレンタインデー愛の類型賜りぬ  
こののちの山坂いくつ卒業す  
沈丁の闇に分け入る安堵かな  
お釣りほどの余生うるほす春帽子  
切り過ぎし憂さ深爪も春愁も

からくり

千田

敬

東風ふかば神保町の古本屋  
紙雛省略といふ無辺かな  
啓蟄の火縄臭めく百人町  
連れ添うてをり雪片は雪片と  
春暁のからくりかとも西に月  
朝日子の万朶にあそぶ裸木よ

# 潮鳴集



スタートライン 栗原 公子

立春大吉スタートライン引きなほし  
伊勢海老のひげありてこそめでたけれ  
寒晴やゆがみて乾くバスタオル  
寒月光みちて秘密の部屋めける  
蒼天の何をしるべに鳥帰る

ふつくらと 小嶋 洋子

絵巻図の幕あひとして春の雲  
鳥帰る網棚はもう網でなく  
春手套おけば花摘むかたちして  
一番の歌詞しか知らず日永かな  
ふつくらと花魅ふくらむ春の月

日の温み 佐々木よし子

寒天へパンタグラフの伸び縮み

冬天の風掴みたり熱気球  
川涸れて石百態の日の温み  
連山の雲をつらぬき鳥帰る  
発掘の須恵器に焦げ目下萌ゆる

虫けら 中島あきら

老人の話筒抜け梅三分  
虫けらといふ命あり野を焼けり  
うぐひす餅買うて草食系男子  
大寒や刃物が帛を裂くやうに  
足跡は闇が消しゆく春の雪

波 音 大川ゆかり

日向ぼこ翼ゆつくりたたみけり  
田の土の指にほぐるる四温かな  
叱陀するやうに波音野水仙  
春立つや七色マールチョコレート  
ふつくらとフェルトの帽子山笑ふ



# 沖作品



# 能村研三選

千年の神杉に満つ淑気かな  
勝独楽といふも孤独の渦の中  
まなかひに初富士拜し子の住まひ  
切先を研ぎすましたる大氷柱  
いのち濃くありたる寒のぼたんかな  
かく小さき兎の鼓動胸に抱く  
極限にしぼる曲線弓始  
牡丹鍋つつく一人が怪気炎  
朝礼の声の割れたる寒の入  
地吹雪に白といふ闇ありにけり  
君を待ち手袋人形出来上る  
優しさとつよさ海より去年今年  
年々に故郷を遠く海鼠囃む  
流水の来るぞ来るぞと酒を酌む  
白魚火の頼りなげとも怪しとも

市川市

荒原 節子

神奈川県

福島 茂

鈴木 浩子

理髪灯こな雪の舞ひしきりなる  
而して草食系の新成人  
シャンパンの泡の小休み四温光  
恋猫になりて使はぬ猫の路  
玉葱を透くまで炒め建 国日  
春を待つリバーシブルの色替へて  
ひっそりと暮るる砂場や大旦  
雪やまず天地の音消えにけり  
看取り終へひとり深夜の雪見かな  
鯉跳ねし水より春の立ちにけり  
望郷の眼を持てり檻の鷹  
冬晴やトランペットの出し抜けに  
煤逃げのポケットにある万歩計  
雪に棲み雪を諾ふ奥信濃  
左義長の闇を押しやる炎の勢ひ

市川市

和田 満水

千葉県

峰 幸子

神奈川県

岩瀬江美子

# 沖作品 15句選評

\*  
能村研三

勝 独楽といふも孤独の渦の中

荒原 節子

独楽は、正月の男の子の代表的な玩具である。喧嘩独楽は同時に回して二つの渦がぶつかり合い、相手をはじき飛ばしたほうが勝つ。また、いかに長い時間回っていられるかを競う場合もある。敵を蹴散らし、弾けあつた独楽は渦をまいて回っていても何か孤独感がある。これは独楽だけに限らず、人間が勝敗を賭けて競うものであれば、たとえ勝負に勝つたとしても、いつまでも優越感に浸っているだけでなく、勝者は勝者なりの孤独感といったものがつきまとうものである。

極 限にしぼる 曲線 弓始 福島 茂

弓道独特の張り詰めた緊張感はなんとも言えない。まして新年の弓始ともなればなおさらである。「弓道をやると集中力がつく」とはよく言われているが、それだけではない。うまく矢を射るためには体力だけでなくそれなりの技術も必要である。

「心・技・体」のバランスが重要で、弓道をするにより、精神力、身体能力を高めることができる。弓道は型を重視する競技とも言われるが、矢を的に当てる為には、弓は極限まで引き絞つてから矢を放たねばならない。

優しさとつよさ海より去年今年 鈴木 浩子

作者は湘南の海を毎日眺めながら、日常生活を送る方であるが、海には一年を通していろいろな表情がうかがえる。優美な白浜もあれば、足下をのぞけば引き込まれそうな断崖など、海には全てを包み込むやさしさと強さと包容力とか荘厳さとかがある。新たな年を迎えるにあたり、この海の優しさと強さへの恩恵に対しての感謝の気持ち湧きおこった。

而して草食系の 新成人 和田 満水

「草食系男子」と言う言葉が流行っているが、このところ俳句でもよく詠まれるようになった。その定義は「心が優しく、男らしさに縛られることなく、恋愛にがつがつせず、傷ついたり傷つけたたりすることが苦手な男子のこと」だそうだが、我々の世代では考えられないことであつたが、これも現代の風潮を表すことなのだろう。今年成人式を迎えた平成生まれの若者たちの気質はこんな感じなのだろう。

春を待つリバーシブルの色替へて 峰 幸子

裏返して着る事もできるリバーシブルのスーツやジャケット、さらにはネクタイなどもある。表と裏の色柄が大きく異なっている、一枚の服装やネクタイで気軽にイメージチェンジができる。このリバーシブルの裏地になる色は、大抵メインの色とはかなり色相の違う、多くの場合反対色に近い色が多い。いずれにせよ、お洒落で経済的なりリバーシブル、春を待つうきうきした気持にも合わせて着こなすのも一興である(以下略)